

一 神 楽

平安時代には、内侍所の宮廷神楽を御神楽とよび、宮廷以外の神社の里神楽と区別していた。しかし、現在では、神社の祭りに奉納される里神楽を神楽と通称している。

流派・神楽社 県内の神楽は、採り物神楽と岩戸神楽に分けることができる。幣神楽と通称される採り物神楽は、神の依りつく神座を清め、神懸りになる舞として始まったと考えられる。直面（面をつけない）で幣・鈴・扇などを採って舞うものには、三輪流と佐伯系がある。三輪流は、旧臼杵領であった臼杵市から三重町にかけて分布する。その神楽社には次のようなものがあるが、現在中絶しているものがあり、記載洩れもあると思う。以下同じである。

臼杵（臼杵市）、堅浦・警固屋（津久見市）、下藤（野津町）、上田原・牟礼・本城・川辺（以上三重町）

佐伯系は旧佐伯領の佐伯市・南海部郡に分布するが、神楽社の体をしていないものが別にある。

落野浦（津久見市）、堅田（佐伯市）、蒲江・河内・屋形島・西野浦・竹野浦河内



植野神楽の「小一郎」(中津市)

・楠本浦（以上蒲江町）

蒲江町では王子神楽と称して、第41表の日向系（2）と同じ演目二番を含んでいる。以上の外、明治三十年の「神社慣例」（大分県立大分図書館蔵）に記す大分地方の神楽は、採り物神楽と思えるが廃絶している。直入・日田郡にも採り物神楽があったらしい。

岩戸神楽は神話を題材とした着面の神楽である。豊前系・国東系・大野系・日向系に大別される。豊前系は主として県北地方に分布する。

第38表 豊前系神楽社

市町村	神 楽 社
中津市	植野・福島・蛸瀬・相原
三光村	佐知・深秣
本耶馬溪町	屋形・耶馬溪
耶馬溪町	戸原・大野・深耶馬
山国町	山国
宇佐市	住江・尾永井・矢部・時枝・麻生
院内町	日岳・北山・大門・来鉢・十ヶ平
安心院町	大仏・安心院
湯布院町	並若
玖珠町	木牟田

第39表 国東系神楽社

市町村	神 楽 社
大田村	俣水
真玉町	有寺
香々地町	羽根・見目・夷
姫島村	大帯八幡社
国見町	武多都神社・伊美別宮社
国東町	来浦・国東・大恩寺
安岐町	富永・手野
杵築市	年田
山香町	倉成・山香
日出町	津島・成行

大野系神楽社

市町村	神楽社
大分市	〔豊後・府内・二目川・大内・木佐上・伊与床〕
挾間町	挾間
庄内町	〔小野屋・畑田・瓜生田・竹ノ中・高津・葛原・雲取〕
湯布院町	由布院
野津原町	丸山・宇曾・岡倉・白家
蒲江町	葛原
宇目町	宇目・重岡・伏野
犬飼町	黒松・栗ヶ畑
千歳村	柴山・大木・大迫
野津町	木所
三重町	松尾・奥畑・三重町
大野町	大山・折小野・浅草・八坂
朝地町	若宮・板井迫・深山・綿田
清川村	宮迫・春日
緒方町	緒方・平石
竹田市	城原・次倉・片ヶ瀬
萩町	萩神社・田代
久住町	宮処野神社
直入町	天祖神社・水ヶ迫
上津江村	豆生野

第40表

七七七(〔神楽言句書〕)の順である。江戸時代の神楽奉仕者が判明するのは、玖珠神楽と来浦神楽だけである。玖珠郡では五穀成就祈願に郡内の八一二社の神職が奉仕している。国東町来浦では、雨乞い・日乞いに岩戸神楽を奉納しているが、数社の法社(法者)が主に奉仕している。国東地方では、神楽奉仕者をほしやどん(法者殿)・めいほしゃ(舞い法者)という。法社は神職の補佐を務める人である。以上の例は、幕府の代官所や藩が祈願を命じた時のものであるが、奉仕者は神職や法社であって一般農民ではなかった。このことは、江戸時代には、神楽は神事の重要部分であったことを意味している。

演目 三輪流・佐伯系などの採り物神楽は、岩戸神楽に比べれば演目数は少ないが、直面ばかりではない。三輪流の返間・柴引・綱切、佐伯系の神遊・御綱・庭燎では面をつける。演劇的要素は薄く、神楽が祭式の一環であった面影を強く残している。三輪流は返間を重視し、佐伯系では舞殿に十字に渡した白布を切る、綱切と通称される御綱が上げ神楽として奉納されることが多い。庭燎はいわゆる湯立である。豊後系神楽の湯立は、釜の熱湯に浸した笹束で湯を浴び、参拜者も無病息災を願って湯玉のかかることを喜ぶ。

植野神楽(豊前系)は、四七番を適宜に三三番ずつに組み合わせ、神阪・湯立・年回の三神楽に編成している。神阪神楽は祭りの時に奉納するので神楽神楽である。湯立神楽は三本柱の上に釜を置いて薪を焚き、最後におきの上を渡る点は、英彦山修験の火渡りの影響が考えられる。死者を供養する年回神楽が編成されたのはそれほど古くはない。湯布院町の並若神楽は、宇佐郡院内町の十ヶ平神楽から伝授された豊前系の神楽である。植野神楽の神阪神楽と、並若神楽の演目を比較すれば、共に三三番であるが演目には若干の違いが見られる。さらに並若神楽には大蛇退治があるのに、植野の神阪神楽にない点が異なる。しかし、御先・御前を重視することや、岩戸開きの構成が基本

国東系は国東半島に分布する。
大野系は大野郡を中心に、大分市から直入地方を経て熊本県阿蘇地方まで分布する。

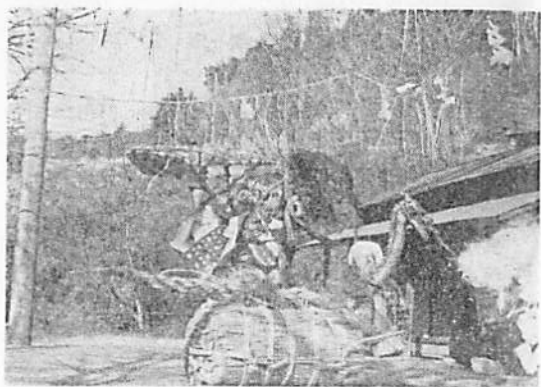
日向系は、玖珠郡の玖珠(九重町)一社(日向系(1))と、蒲江町の丸市尾・森崎・野々河内の三社(日向系(2))の二系統がある。

沿革 各神楽の起源についてはそれぞれ伝承があるが、文献で確認できるものを年代順に記すと、まず犬山神楽があげられる。年不詳であるが、十時撰津守が田地八反を神楽免として寄進している(木上津神社社格昇格申請書)。恐らく大友氏が除国される文禄二年(一五九三)以前であろう。津島神楽は元和二年(一六一六)(城内文書)、三輪流は正保二年(一六四五)(三嶋神社社家系図)、来浦神楽は貞享三年(一六八六)(来浦村明細帳)、御嶽神楽は享保二年(一七一七)(御嶽神社社家加藤家記録)、玖珠神楽は享保五年(一七二〇)(大神楽工伝書)、丸市尾神楽は延享二年(一七四五)(岩戸神楽願文事)、夷神楽は安永六年(一

的に同じで、豊前系とよぶことにためらいはない。

来浦神楽(国東系)と植野の神阪神楽の演目を比較すれば、演目名はかなり似ているものが多い。そして両者とも岩戸開を神楽の最後に配置する。岩戸神楽とよぶにふさわしいだけでなく、御先・御幸を重視する点も共通している。御先・御幸は中国地方の荒神神楽のようであるから、両者が中国地方系であることをうかがわせる。しかし、植野神楽では岩戸開の四方鬼が順次に一名ずつ登場するが、来浦神楽では四ツ鬼として登場する。所作も前者がより能楽的な面を漂わせているから、両者が中国地方から伝えられたとしても、その場所や時期が異なるであろう。また、来浦神楽にある大蛇退治は、植野神楽では湯立・年回神楽にはあるが、神阪神楽に入れなかったことは、それほど重視していなかったものと思われる。植野神楽の基本部分は中国地方から伝来したとしても、時代や環境の要請に応じて、次々に演目を追加したことが、国東地方の神楽とはニュアンスを異にするのであろう。これに対して、国東地方や速見郡の日出町・山香町の神楽の演目は、来浦神楽と大同小異といえるし、同じ豊後ではあっても大野系とは著しく異なるので、国東系とよぶのがふさわしい。ただし、国東神楽の演目名がきわ立って違うのは、大正初年に改変されたためである。

大野系には御嶽・深山・浅草の三流がある。御嶽流は御嶽神社(清川村)、深山流は深山八幡社(朝地町)、浅草流は浅草・上津両八幡社(大野町)に伝わった神楽である。しかし、この三流派の神楽はほとんど弁別できないほど似ている。北野尚人は、深山・浅草両流は御嶽流より派生したと指摘する(「岩戸神楽の葉」)。たしかに十八世紀後半、御嶽神社神主加藤長古が神楽を創案・追加したことは、弘化二年(一八四五)の絵像に彼の功績をたたえた記事があるから否定できない。しかし、十九世紀初めには、御嶽流の演目は神弥など二番であり、弘化二年に二番、文久三年



松尾神楽の「八雲弘」(三重町)

(一八六三)に五番を追加したというが、それでも一九番しかない。これに対して、御嶽流より派生したとされる深山流には天明七年(一七八七)の「神楽大事」、浅草流には文政十一年(一八二八)の「神代御神楽参拾六番俗説荒増」があり、それぞれ三三番と三六番の演目が記してある。しかも両者の手振り用語が異なり、上津八幡社には大友時代末に神楽があった記録があるから、深山・浅草両流が御嶽流よりの派生とは考え難い。いずれにせよ、加藤家所蔵の正徳二年(一七二二)以降の記録に、この問題を解く鍵がありそうである。しかしながら、まだその記録を見る機会を得ていない現在では、明治三十年に結成された大野郡楽員会の下で、各流派が出会い神楽を通じて長所を採り入れたため、流派ごとの特色がなくなったと考える外はあるまい。大野系は、演目名がいかめしく演劇的色彩も多いが、中国地方のものにくらべればまだ単純である。そして岩戸開もあるが、八雲弘という大蛇退治を重視する点で、豊前・国東両系と大きな相違があるといえる。

丸尾尾神楽と同系統の神楽が宮崎県の北川にあるという。富尾神社神主塩月氏の先祖は北川出身であるから、その関係で延享二年以前に北川の神楽が当地に伝えられたとも考えられる。日向系の神楽は岩戸神楽であっても演劇化は進んでいない。玖珠神楽は、享保五年(一七二〇)、御広実社神主の二男藤原友種が伝えたという(「大神楽工伝書」)。御広実社は高千穂神社の古称であるから、日向の高千穂神楽系ということになる。昭和五十九年、第一回日本岩戸神楽

第41表 神楽の演目・人数

三輪流 (白杵)		佐伯系 (堅田)		豊前系 (植野)		国東系 (来浦)	
柴入	4	神開	4	清祓		一番神楽	4
入座	4	入座	4	奉幣	5	幣証男	4
太刀	4	魔祓	4	大麻舞	4	花神楽	2
正護	4	玉串	4	壺人手房	1	四津手	4
大神	1	御弓	2	式人手房	2	結開	2
○返閉	3	織居	2	大汐舞	4	二手草	2
○四天	4	長刀	2	大神	4	弓ノ手	4
○柴引	1	○神遊	2	早神	4	地割	6
○喰持	4	○御劍	1	美々久	4	大神神楽	1
○綱切	1	○御華	2	○御先	2	岩戸立	3
		○御綱	1	三神	3	○御幸	2
		○庭燎	2	幣証護	4	○踏素戔鳴	1
				○御子神楽	2	●大蛇退治	5
				四ツ手	4	白頭	1
				弓証護	4	○手力雄命	1
				地割	6	八重垣姫	1
				掛手房	2	○四ツ鬼	4
				○神迎	5	○戸取明神	1
				鎮座	1	児屋根之命	1
				引入柴	4	神迎	2
				○綱御先	4	注連払	1
				○思兼命	1	小太刀舞	1
				○東方鬼	1	神送	2
				○南方鬼	1	湯立神楽	1
				○西方鬼	1		
				○北方鬼	1		
				○石凝留命	1		
				○玉祖命	1		
				○太玉命	1		
				○長白羽命	1		
				○宇須女命	1		
				○手力男命	1		
				七五三被	1		

○ 着面舞
● 演劇的着面舞

● 岩戸次第

大野系 (深山)		日向系(1)(丸市尾)		日向系(2)(玖珠)	
五方礼始	5	地堅	2	舞降	
○五穀舞	6	一神楽	2	奉幣舞	
○柴曳	2	地割	2	扇舞	
○平国	4	禰宜	2	相舞	
○綱武	5	くりおろし	2	○御幣	
●綱母	2	○貴神	1	○百穀杖	
●神逐	5	拔掛	2	○百穀稻	
●貴見城	8	花舞	2	○大己貴命	
●八雲弘	4	○荒神	1	○経津主命	
●降臨	9	沖江	2	弓立	
●底火	7	山守	1	○鬼	
●磐戸開	8	○山の神	1	結解	
○随神	2	○山注連	1	○幣手力雄命	
○心化	8	○祝詞	1	○健素戔鳴命	
○神使	6	○一番戸取	1	○五穀舞	
●誓約	4	○柴曳	1	手草	
○天之注連	3	○二番祝詞	1	○折敷舞	
●地割	4	○二番戸取	1	三々九度	
大神開	4			○思兼命	
柴入	4			○神祇舞	
手撒米者	4			○日影	
武魔弘	4			○神素戔鳴命	
平戸舞	4			方位	
岩戸劍	3			○王位	
綱伐	1			○港田	
○荒神	2			○八鉢	
●天皇	6			○十二鬼	
舞遣	4			○大倭舞	
○返拝	2			○天鈿女命	
綱口	5			○猿田彦命	
				○豊磐窓命	
				○串磐窓命	
				○萬々歳	

大会で上演された高千穂神楽は、装束こそ違っていたが、舞い方は玖珠神楽とよく似て、両者は同系統であることが確認された。しかし、両者の演目名は著しく異なるので、主として岩戸神楽の部分のみを伝え、その他の演目は以前から玖珠地方に伝わっていたものである。玖珠神楽は、着面舞は多いが演劇的要素は薄い。

採り物・装束 採り物は、豊前系が扇、豊後の方は鈴を主にする点で顕著な違いがある。太刀と弓矢は日向系、

第42表 神楽の採り物・装束

採り物・装束	系統(神楽社)																			
	鈴	幣	扇	太刀	弓	鬼杖	その他	烏帽子	毛頭	天冠	狩衣	大紋	舞衣	千早	側付	陣羽織	袴	裁着	大口	
佐伯系(堅田)	○	△		△	△			○			○						○			
三輪流(堅浦)	○			△			神	○			○					△				
日向系(2)(玖珠)	○		△				腰幣		△	○	△									
日向系(1)(丸市尾)	○	△	△			△		△			△		△	○					○	
大野系(深山)	○	△		△	△		大幣	△				△								△
国東系(来浦)	○	△	△	△	△			○	△		○									
豊前系(植野)		△	○	△	△	△		○	△		○				△		○	△		
系統(神楽社)																				

(○印は主として使うもの)

鬼杖(豊前系)・面棒(日向系(1))・花杖(日向系(2))は、国東系・大野系・三輪流・佐伯系などではほとんど用いない。大幣は大野系、腰幣は日向系(2)の特色である。被り物では、烏帽子は豊前系・国東系・三輪流・佐伯系などに多く、大野系・日向系(1)は毛頭、日向系(2)は天冠が目立つ。烏帽子・狩衣・袴は神職の装束である。それらの着用が多い豊前系・三輪流・佐伯系は、神職が神楽を奉仕した伝統を受けると考えられ、江戸時代に神職の奉仕が確認できる、日向系(2)の装束の説明は困難である。神職の装束とも思えない、裁着を着用する豊前系・大野系・日向系(1)は、修験道の影響が考えられそうである。大紋は大野系、千早は日向系、側付は国東系の特色であり、日向系(1)は舞衣・千早・陣羽織を同じくらいに着用する。大野系に使用が目立つ脚絆・草鞋は、裁着と合わせて修験道の影響の濃さであろうか。

二 御田植祭

御田植祭は、檜原山正平寺(耶馬溪町中畑)・宇佐神宮(宇佐市南宇佐)・大原八幡社(日田市田島)・別宮八幡社(香々地町香々地)・城山社(国見町権来)・武多都社(国見町竹田津)・山神社(安岐町諸田)・奈多宮(杵築市奈多)・若宮八幡社(杵築市官司)の八社一寺で行なわれている。この外、三光村田口の箭山神社の聖母大権現祭に、昭和十八年までマツヤクとよばれて行なわれていた。

御田植祭は、(A)種まきのみ、(B)田植えのみ、(C)種まきから田植えまでの三つに分けられる。(A)は檜原マツ(正平寺)、(B)は宇佐神宮・大原八幡社・別宮八幡社・城山社、(C)は奈多宮・若宮八幡社・山神社・武多都社・マツヤクとなる。神事の異同を比較し易いように第43表を作製した。

檜原山は、求菩提山・松尾山・等覚寺山(すべて福岡県)とともに、九州における修験の中心道場である英彦山の衛星的道場であった。英彦山では種まきからはらみ女までであるから、檜原マツでは後半がすたれたものであろう。また、マツバシラ(祭柱?)は立てないが、求菩提山などのように俗化せず、古い姿を留めていると評されている。ヤリマキ(神



大原八幡社御田植祭(日田市)

合・安部弥右衛門・入江英親・岩男 勲・小野喜美夫・梶原良平・加藤泰信・河野通文・久米忠臣・後藤正二・佐藤 暁・佐藤 節・佐藤善忠・軸丸 勇・首藤光生・千田豊房・田塚安永・富高丈夫・豊田寛三・二宮敏幸・藤垣敏信・松岡実・村井福丸・守田和之・守田隆至

大分県史 民俗篇

昭和六十一年三月二十五日印刷
昭和六十一年三月三十一日発行 【非売品】

編集 大分県総務部総務課
大分市大手町三丁目一番一号

発行 大分県

印刷 日の丸印刷株式会社

別府市中央町九一―一五
電話 〇三三四―一番